

# 陰 進

## 週刊

2024年  
9月 第4週

発行元  
最前線

anarcho.clitorist@gmail.com  
編集 仁科夏瑚

保存用 紙版

1ヶ月 300円

月毎に郵送いたします。  
詳細は上記連絡先まで

# 女性限定!?! 牛角コース半額キャンペーン

## 行ってみた。

「女性限定焼肉」と揶揄されたキャンペーンをご存知だろうか。日々のTLチェックに余念のない読者の方ならまだ記憶に新しいだろう。焼肉牛角が開催した「女性半額」キャンペーンは「焼肉デザートで牛角を選べば1,969円お得」期間限定「女性半額」食べ放題」というキャッチコピーのもと、9月2日から12日までの期間限定で実施された。牛角の出展を記念し、公式アプリ会員かつ月曜から木曜の事前予約に限り、女性は牛角コース・堪能コースが半額になるというものである。本キャンペーンはSNS上で大炎上し、「女性にだけ安く提供するの男性差別」「米国ではこのようなキャンペーンは違法」など多くの批判が寄せられた。一方で、キャンペーン開始後はすぐに予約が殺到し、都内の店舗では2日目にして予約が困難となったほどだ。

フェミニズムを扱う団体として見逃す訳にはいかず、私と775りす氏、フェリス秘書子氏は牛角東戸塚店を訪問した。東戸塚なら辺鄙で空いているだろうという期待から予約をしたが、実際は東戸塚駅のすぐそばにあり、アクセスも悪くない場所だった。特に身分証の提示は求められず、女性の可能性があるなら女性、という雰囲気でのキャンペーンは運営されていた。席に着き、牛角コース6人分と飲み放題を注文した。牛角コースは通常価格3,580円のコースがキャンペーンで女性半額1,790



「デザートでも」が想定

話題になったツイー



aniotakirara @aniotakirara

フォローする

牛角の男性差別商法、私の導火線に火がついた。絶対許さねえぞ。今まで個人店のレディースデーは数えきれないほど戦って潰してきたけど、今度はそれなりに名の通った企業相手だから全身全霊で戦いを挑んでやる。徐々に闘志が湧いてきたよ。合法の範囲内で使える手はどんな手を使ってでも戦ってやる。



一杯目の飲み物をオーダーし「女性に乾杯」▲

めだが、食べ放題にもかかわらずデザートは一人一品のみの制限があり、残念だった。女性半額が行きつけかけになったが、再訪には理由が必要そう。 (KOSI-MOS)

円になっており、30日間熟成肉、大判や厚切りのカルビ、おつまみ、メのラーメンなど、全90品を楽しむことができる。実際に訪問してみた感想だが、総合的には「焼肉きんぐ」のほうが満足度が高いと感じた。まず、注文はタブレットで行うものの、操作性が悪く、商品の画像も魅力に欠けていると感じた。さらに提供時間が非常に遅く、注文が通っているかどうかわからないほど遅かった。三人で使うテーブルは狭く、数品頼むと置き場所にも困る。味については価格相応で、特に感動はなかったが、タンは美味しかった。また、女性半額キャンペーンに合わせた実施されていた「韓国フェア」は、良い試みだと思ったが、フェアのメニューは単品が中心で、食べ放題プランの魅力とはやや乖離している印象を受けた。食べ放題プランのデザートに含まれていた「クルンジアイス」はパリパリの生地とアイスの相性がよく楽し

「自立」と「協力」のもとに集え  
クリトリスはアナーキストである！

カトリーヌ・マラーブ  
『抹消された快楽 クリトリスと思考』より



# 切腹フェミニズム概論

女の切腹とは最も能動的な究極のフェミニズム行為である。自らの子宮ないし女性器に力を入れ流血しながらひらく行為は、剣に対する鞘としての女性器や、子宮の「容器」としての象徴に真つ向から挑まんとする行為である。

まず、切腹の起源について、最初に詳しい様相が記録された人物としてしばしば名が挙がるのは藤原保輔、佐藤忠言である。しかし、「切腹」という語が誕生するずっと以前、神話時代にまで範囲を広げれば、この列島においてはじめて自らの腹を切ったのは『播磨国風土記』に登場する女神であるとする説がある。腹辟沼(はらさきぬま)の条として知られるそのあらずじは、淡海神という女神が夫のあとを追って遠い里になり、そこに棲む鮎などは今も五臓がない、というものである。

ここで問題にしたいのは、「その沼の鮎等、今に五臓なし」という最後の一節である。この一文から、淡海神は腹を辟いたのち、五臓を掴みだして入水したのと思われる。つまり、日本で初めて腹切った人物は、怨念に突き動かされて腹部をひらき内臓を放棄したのである。武士の誕生から今に至るまで、切腹は忠誠心を示す、または自らの罪の落

とし前として、自身の「義」によって課される罰のようなアイデアを内包してきたが、本来それは、非常に強い感情の発露として、しなないといられないという欲望による、人間の自然な情動に即した行為であるのではないか。少なくとも私は、このような含意を以て「切腹」という語を用いる。

ところで、先ほど女性器について「剣に対する鞘」と述べたが、剣、刀が男性性の象徴であるという意見には激しく反論したい。便宜上「剣」という語を使ったけれども、男性性とは、あくまで鞘を内部から引つ掻き得る剣であり、女性器を介してのみ刃物となる。それ自身のみによって女性性を破壊する方法をもたないという点で「剣(刀)」が男性性の象徴とはなり得ないことを、ここで強調しておく。

ここまで私が提示してきた切腹フェミニズムは、あくまで女性性による下腹部の破壊が目的であり、死を伴う必要はない(よって、切腹と呼称するが介錯等の他の作法を含まない)。しかしお気づきであろうが、死を伴わずにこれを実用化することは、現時点での人間の身体能力や医療技術では不可能である。切腹による傷自体が致命傷になることは稀であるが(その為に介錯という作法がうまれた)、そこから臓器の破壊を試みるとなると、また違った話であろう。よって、この切腹フェミニズムという一連の行為理論も、今のところは観念的な領域に留まるほかない。しかし、ここで扱われる「容器」としての身体感覚の問題は、観念的な自己やジェンダーの問題とも少なからず関わりをもつ。そのためしばらくは観念的な領域や芸術野からのアプローチによって、実用化の日を



奈良初期に編纂された

追いつけるつもりである。(佐鞍「躁」)

